地域共生社会の実現

法人名	株式会社虹のひかり
事業所名	地域密着型デイサービス虹のひかり
サービス種別	地域密着型通所介護
発表者　職種・氏名	代表取締役　井上真理子

私たち「虹のひかり」は、地域密着型デイサービス、共生型児童発達支援・放課後等デイサービス、保育室、訪問看護ステーションを持ち複合的なサービスを展開している事業所である。私は、この事業を行うまでの３７年間を急性期病院で勤務し、急性期病院を離れる最後の病棟が小児病棟であった。その小児病棟で退院後の生活が気になる親子がいても病院では支援しきれない気持ちでいっぱいになり地域に飛び出した。地域では、赤ちゃんからお年寄りまでを看たい・支援したい気持ちから、私たち「虹のひかり」は、生まれてすぐの赤ちゃんから天寿全うまでのお年寄りを対象とした。そのため、富山県で事業展開している「富山型デイサービス」と呼ばれる高齢者と子どもの共生型のデイサービスに加え、保育室をつくり、子どもであればだれでも受け入れるようにした。地域密着型デイサービスに共生型児童発達支援を加えたサービスは一宮市では初である。更に保育室、訪問看護ステーションを加えて事業展開している事業所はまだ聞いたことはない。

お年寄りと子どもたちが共有の空間で過ごす「虹のひかり」では、認知症の利用者が笑顔で過ごせ笑い声が絶えない。世代にわたる交流は高齢者の生活では絶対に味わえない。そのお陰で利用者は、最期まで人として生ききる力を持ち続けられる。このような日々の活動を通して、「地域とのつながり」を感じている。

活動を紹介する前に私たち「虹のひかり」がある土地柄を紹介したい。私たち「虹のひかり」は愛知県の北西部の尾張地方に位置し、名古屋市からは電車で 10 分ほどのところにある一宮市にある。一宮市の人口は、約３８万人で愛知県内では名古屋市、豊田市、岡崎市に次いで４番目に多い市である。現在、６５歳以上の人口は約１０万人で高齢化率２７．２％（全国平均と同等）である。地元を離れる若者世代が増え、高齢者夫婦世帯数と高齢者単身世帯数の合計は約 3 万人（平成 29 年度統計）で年々増加している。一宮市は、明治時代から昭和にかけて繊維産業が発展し、毛織物王国・一宮として有名で「がちゃまん景気」といって、機織りを「がちゃ」とひと織りすると万のお金が儲かるとも言われた。一宮市の人は景気が良い時にはお客が来るとお茶やお菓子をふるまった。お歳暮やお中元の時期には、某百貨店で手土産の菓子を購入し、大切なお得意様やお世話になった人へ渡すことが一宮市流のおもてなしであった。最盛期には沢山の人々が出稼ぎに来て、商業地としても賑やかな街が栄えた。その時代を生き地元一宮市を愛し今でも誇りに思う人が、今９０歳前後の高齢者となっている。良い意味で自身にプライドを持ち、おもてなしが好きである。半面、世話を

してきた自分が世話をされることに抵抗を感じる。なるべく世話にならずに、何とか自宅で暮らしたいと思っている。「虹のひかり」がある周辺の一宮駅から真清田神社周辺も賑やかだった商店街が以前より縮小され、住宅などが郊外に移動し、住宅跡地に駐車場やマンションが建つようになった。日常の買い物は、スーパーが無くコンビニと大型薬局のみで、それも場所によっては１㎞ぐらいあり、自転車にも乗れなくなると大変不便である。

このような地域の特徴に加え、「虹のひかり」の利用者の多くは、歩いて通える距離にあるクリニックに通院している。クリニックは健康に大切な存在であり、近所の方々をつなぐ拠点にもなっている。その通える範囲であったクリニックも本人が老いることで足腰が弱り、心肺機能、認知機能の低下により近くても遠いところになった。そしてクリニックの受診には、自身の子ども世代が送迎を行い、子ども世代の人たちが介護に困るようになった。

　このような背景の一宮市で「虹のひかり」は訪問看護ステーションから事業を始めた。訪問看護の開始当初は、「来なくていい、ほっといてくれ。」と何度も言われた。本人の体調が悪く動けないときに手助けができると「また来て頂戴。」に変化する。関係性ができると「今度はいつ来る？」や「ちっとも来てくれん。」になる。訪問看護は点のサービスで安心感や待ち遠しさの解消はできるが、一緒に楽しむことや笑うことにつながらない。訪問看護は健康のコントロールはできるが、人生を謳歌することへの手助けはなかなかできないと感じていた。そのため地域密着型デイサービスを開業することとなった。

まずは建物を建てる地域選びである。建物は、一宮市の中心でかつては賑やかな商店街があった真清田神社の近くで訪問看護ステーションがあるクリニックの近くとした。建設にクリニックの医師が携わったことは利用者の中でも大きな話題になった。建物はザ・施設ではなく一般家庭の一軒家にすることにこだわった。ハウスメーカーに協力依頼し、一般家庭に近い施設建設のプロジェクトを立ち上げ、施設外観から内部構造まで考案してもらった。丁度建設の前年までコロナが大流行して施設内感染で利用者が命を落とすことも多くあったため、感染対策できる隔離室、隔離室からの出入りなども入念に考えた。

デイサービスを利用し利用者の生活にどのように組み入れるかは、一人ひとりの気質・性格と生活を考慮した対応が必要である。例えば老々世帯や単身世帯の人が多いため、１日中のデイサース利用は、自分の家での役割（洗濯や掃除、仏壇のお参りなど）ができない状態が続くと困るようであった。これは、訪問看護で利用者の背景を理解する中で分かったことである。

　また、この地域の人たちの好みを理解し、それを地域密着型デイサービスに盛り込んだ。

浴槽は、「家の風呂に入りたい。」と希望される訪問看護利用者の声を活かし、あくまでも一般家庭らしいものにした。機械浴ではなく人の手を使い、車椅子で洗い場まで入れる広さを取った。湯の温度、洗い方、湯につかる時間など入浴は個々の好みがあるため個浴である。もちろん浴槽の湯は浸かると湯があふれるぐらいのたっぷりの量で、湯に浸かる時間は本人が満足できる時間とした。訪問看護と一体の事業であるため、看護師が介助し、身体全体の変化や活動と休息のバランスを取りながら対応している。

お茶を出す際は、茶托をつけて出し、おやつの時間には家に眠っていた引き出物のコーヒーカップや銘々皿などを使用し、日常ではない特別感を出すことでおもてなしを意識した。

さらに利用者にとっての最大の特別感を感じるおもてなしは、毎年来る誕生日である。「虹のひかり」では、誕生日には手作りの誕生日カードとホールケーキを用意している。サプライズでハッピーバースデーソングとともにケーキを持ってくと、そこには満面の笑みがこぼれ、時にはうれし涙を流し喜んでくれる。「こんな誕生日久しぶりだな。」と本人は言い、隣で大きく手をたたく利用者は、「今度は私。」と大喜びである。

送迎は、自分の家から遠回りしない送迎を心がけている。しかし、時には桜が咲けば近くの桜並木を通り、七夕飾りがある夏は七夕の雰囲気を味わえるように回り道をして帰宅する。利用時間を二部制にし、基本は３時間から４時間の半日で入浴・昼食付にしている。朝が弱い人は 11 時半からの利用時間で、朝から来たい人は 9 時から来てもらう。３から４時間なら家に帰ってからもゆっくりできる。利用者は朝に洗濯を干し、帰ったら取り込みできるぐらいの利用時間にしている。利用単位数は、３時間から４時間であれば要介護１でも毎日利用できる。

そして「虹のひかり」には、他にはないことがある。それは子どもの存在である。子どもたちの年齢は、開設当初 0 歳児だったので今は 2 歳前後となり、お座りが出来なかった子どもたちも歩き出し、足けり乗用玩具を乗ることができるようになった。おもちゃを落としては「うるさいね。」と叱られることもある。今の時代叱られなれしていない子どもも多い中、かわいがられたり、時には叱られたり、お年寄りも時には抱っこをし、ミルクをあげたりする。刺激がたくさんの「虹のひかり」は、テレビなどつけることもなく時が過ぎで行く。今話したことを忘れ、クリニックでの長谷川式認知症スケールが一桁の利用者も、「この子大きくなったね。」「あの子は、来ていないの？」など忘れないことも多くある。認知症があってもたくさん笑える日や元気を感じる日が多くあり、「こんなええとこないもんな」と口癖のように言っている。クリニックの先生が、「最近元気になって覇気がある。もしかして虹のひかりのデイサービスに行っているのか？」と尋ねられることも増えた。

利用者のひとりに身体が徐々に動かせなくなる難病の利用者がいた。子どもが大好きで子どもたちに会えること、たっぷりの湯の浴槽に入れることを楽しみに通われていた。食事がとれなくなった時には、好きなあられを食べられるように口の中ででとけるタイプのものに探し、やわらかいコーヒーゼリーや水ようかんなどが食べられる工夫をし、最後まで食べる楽しみをもってもらった。そのような支援が、その後動けないくらい状態が悪くなり酸素が必要で点滴ルートがついたままでも絶対に「虹のひかり」に来たいという強い意思になっていた。ある日「調子が悪くて来られない」という連絡があった。私たちはいてもたってもいられず、その利用者のところに訪問すると持続で点滴をしていた。「今日は子どもたちの顔は見られないけど、私たちが代わりに来たよ。」という声掛けに嬉しそうな笑顔で握手を求められ手を握り合った。その２日後、穏やかに息を引き取られた。家族から「最期まで人らしい生き方でした。」との言葉を頂いた。その言葉通り最期まで自分の意志を貫き生き続けた物語の１ページに寄り添えた気がした。

「虹のひかり」の利用者は、訪問看護とデイサービスを共に利用しているが多く、体調が悪い、風邪を引いたなどのデイサービスを休む連絡があれば、訪問看護に切り替えることを家族やケアマネジャーの了承を得て、昼食用の弁当を持っていきながら訪問看護師が状態観察と、相談にのり対応している。デイサービスと訪問看護との連携した看護力は、本人・家族の安心を得ているうえに、クリニックへの受診の相談、必要時に点滴の実施や内服薬の調整など体調に合わせた支援ができ早期に回復させることができている。

「虹のひかり」は、利用者のウェルビーイングを目指し、安心して元気に過ごすための健康管理と楽しく笑って満足できる生活を支えるサービスでありたいと考えている。最近は、エンドオブライフケアを考える機会も増えた。誕生日のホールケーキをあと何回食べてもらえるかと思うと、日々の会話や行っているケア、楽しそうに笑う姿の全てが愛おしく大切な時間である。「虹のひかり」で過ごす時間は、限りある命の時間や成長している子どもたちの時間の一部に過ぎないが、ドラマのように毎日それぞれの物語を作り、そのひとりひとりの物語が集まって、みんなとともに過ごす物語にもなっている。

昨今は、介護サービスも先進的なデジタル技術の活用や業務の効率化を求める時代である。しかし介護サービスには昔の日本のように、地域での助け合い、支え合いができる地域共生社会の実現が必要であると考える。私たち「虹のひかり」は、一宮市の特徴をつかみ、そこに住む人々を理解し、地域とつながっている。「虹のひかりの」取り組みは、人と人を繋げお互いが助け合いや支え合えるようになり、人をもてなす心や人を思いやる心が育つようになっていくと思う。地域密着型デイサービス「虹のひかり」の「我が事・丸ごと」の取り組みが、一宮市全体、日本全体に広がることを願っている。